教育方法学

教育学科　２回生
竹内夕子

〔目次〕

1章：チームで構想した学校

１．　開かれた学校

（１）はじめに

（２）学校の名前と願い

（３）学校の規模，構成

２．　構想した学校の特色

（１）教師からの視点――「２人担任制」による学級運営

（２）子どもからの視点――環境づくり

（３）家庭からの視点――社会生活と子育ての両立

（４）地域からの視点――“みんなで育てる”地域づくり

2章：多様な能力を持った学習者一人ひとりの学力を高めるために

～算数の基礎学力を定着させる方法～

1．教育改革

2．子どもたちの学力実態

3．算数の授業工夫

4．国語科との関連

5．家庭との連携

3章：学習者の学習成果をどのように評価するか

4章：教育方法学の感想と学習後の印象

１．　チーム学習を通しての感想

２．　学習後の印象

5章：自己評価と公開同意書

1 章. チームで構想した学校

１．　開かれた学校

(1)はじめに

学校が直面している問題は数え切れないほど存在する。例えば、学級崩壊やいじめ・不登校・学力低下問題・特別支援教育・校内暴力・学力格差・学習時間の削減・虐待など、様々な問題があげられる。これらは、学校体制・教師・家庭や子ども自身などに解決すべき問題があり、また様々な要因が重なり合っていると考えられる。

これらの問題を解決していくために、私たちのチームは「開かれた学校」というテーマで理想の学校を構想し、どのようなことが学校に求められるのか、また工夫すべきことは何なのかを模索していくことにした。

ここで示す「開かれた学校」とは、学校が閉鎖的な姿勢でいるのではなく、子どもや保護者・教師・地域、または社会との関わりを重視し、学校教育の情報や場所・ふれあいの機会などを提供していけるような学校のことを意味している。

私たちはこのテーマを、構想する学校の重要な柱として位置づけ、教師・子ども・家庭・地域の4つの視点から考えていくことにする。

(2)学校の名前と願い

私たちが構想した学校の名前は「にじのこ小学校」という。

この“にじのこ”という名前には、学校がどのような場であってほしいかという私たちの願いが込められている。漢字に変えれば“虹の子”である。

虹は、様々な要因が重なり合って、美しいたくさんの色を輝かせる。この、たくさんの色が子どもたち一人ひとりであり、教師であり、保護者や地域の人たちを意味する。

この色を輝かせるためには、そこに至るまでの営みが必要であり、【教師・子ども・保護者・地域】が関わりあうことが求められる。誰かに任せるばかりではなく、自ら参加しようと思える場を作ることが重要なのだ。そしてそこに、たくさんの人が集えば、たった一つの考えでも、何通りものアイディアが生まれ、より深い考えとなっていく。

一人ひとりのいろんな色が共存できる環境を作り、誰もが大切にされることを願ってつけた名前である。

(3)学校の規模と構成

にじのこ小学校の児童数・教師数を示し、学校の規模を紹介する。

- 児童数・・・〈30人学級×3クラス(1学年)×6学年〉＝540人
- 教師数・・・学級担任　〈2人(1学級)×18クラス〉　＝36人

  校長・教頭　〈1人＋1人〉＝2人

  教務・障害児学級担任・養護教諭

  ・・・・・〈1人＋0～2人(状況に応じて)＋1人〉　＝2～4人程度

  約40人
- 職員・・・公務員・給食職員(自校方式)〈1人＋8人程度〉　＝9人程度

⇩

児童数　540人　、　教師数　約40人　、　職員　約9人

2. 構想した学校の特色

(1)教師からの視点

【「2人担任制」による学級運営】

まず、上記の『学校の規模と構成』でも示したように、1学級30人を教師2人で運営していく「2人担任制」を取り入れることにした。しかし、従来の考え方とは異なるため、理解をする上で注意が必要である。

この制度は、従来の“主担任，副担任”という考え方ではなく、教師2人ともが“主担任”として学級運営をしていく制度なのである。つまり、教師2人が対等な関係にあり、その2人が協力しながら学級づくりをし、授業をしていくということである。

では次に、2人担任制による教科指導、メリット・デメリットなどを述べていきたい。

＊＊　教科指導　＊＊

教科指導においては、二人の専門性を活かして分担、または協力体制をとっていく。

例えば、A先生は国語・社会・図画工作・体育が、B先生は算数・理科・体育が、専門または得意である場合、話し合った結果、A先生が〔国語・社会・体育〕を担当し、B先生が〔算数・理科・図画工作〕を担当することになる、というように分担する。

専門性・得意分野が重なった時は、どちらかが譲る形で決定させていく。そうすることで、自分の指導とは違う授業を教師自身が学ぶことも可能であり、不得意な分野を研究していけることにもつながる。他の教科についても同様である。

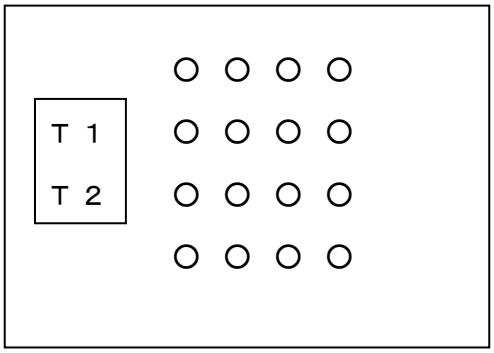
≪担当教科についての話し合いイメージ≫

≪形態≫

授業中においては、一人の教師が授業をしている場合、もう一人の教師が机間巡視をし、子どもたち一人ひとりの学習をサポートしていく。二人の目で状況を把握し、子どもたちを導いていくことができるのだ。評価をする場合も、2人の視点で子どもの実態を捉えることができるため、見落としや偏見を軽減することができる。

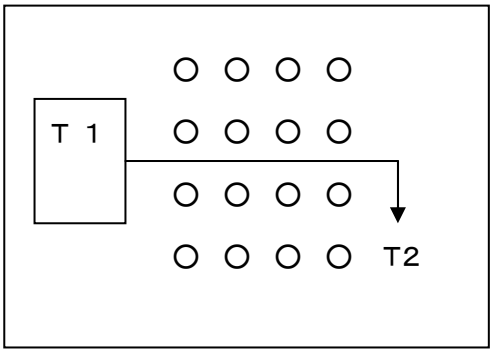
● T1が全体指導、T2がサポートする

授業中のある部分(導入など)を 2 人で行う。



● T1が進め、T2が児童の支援をする

T2が児童の学習状況を把握する。



＊＊　２人担任制におけるメリットとデメリット　＊＊

<メリット>

① 専門性を活かすことで、より質の高い授業を行うことができ、子どもたちの興味や意欲を引き出せる可能性が広がる。

② もう一人の教師の授業を見ることで、教師自身の授業力を高めていける。

③ 集団での多様な活動ができる。(1人担任制よりも、活動の範囲と種類を広げることができる)

④ 広い視野で考えられる。　⟶　子どもの見方についても、違う視点から見られる。

⑤ 余裕ができ、子どもに目が向きやすい。　⟶　子どものことを最優先に考えられる。

⑥ クラスの状況をリアルに理解している教師がもう一人いることで、問題を一人で抱え込まずに相談できる。

⑦ 児童が、小学校生活でより多くの大人(教師)と出会える。⟶　より多くの価値観に触れられる。

⑧ つまずきや個人差に応じた、きめ細やかな対応ができる。

<デメリット>

① 教師の人間関係により、学級運営の方向が定まらなくなる恐れがある。

⟶「自己流」がいい。人に気を使いながら授業をするのは嫌。

⟶「気の合う教師」もいれば「気が合わない教師」もいる。

② 教師数が多いために、経費が増す。

③ 価値観の多様さが、子どもたちを混乱させる可能性がある。

④ 束縛感を与えてしまう可能性もある。

⇩

デメリットとしてあげた点に関しては、対応策を考えなければならない。

- 対策の一つとして、**人事の配慮**があげられる。教師の経験や年齢・専門・希望などを把握し、それらを考慮することが重要である。また、教師同士でよく話し合い、互いの考えをすり合わせていく必要がある。

＊＊　協力・連携　＊＊

もう一つ、学校教育を充実させるためには**家庭・地域との連携**が欠かせない。家庭訪問をしたり、個人的な相談を受けたりすることで、子どもが置かれている状況を把握することができる。また、家庭・地域の方々との信頼関係を育み、協力して取り組んでいくためにも大切なことである。

(2)子どもからの視点

【環境づくり】

子どもは“環境”から学び、自身の成長に大きな影響を与える。家庭・友人・学校生活などの全てが影響するのだ。周囲の土地環境(自然環境)も同じである。

自然が大幅に減少した現代社会では、おもいきり遊べる場所が少なく、自然と触れ合う経験も年々減少している。

ここでは、子どもがのびのびと生活し、自己を発揮できるような環境設定について示していくことにする。

① まず、学校の敷地内に自然を取り入れ、**“森コーナー，池，畑”**などを設置する。たとえ「人工」自然であっても、子どもたちが動植物の命を感じ、また、おもしろさを感じられるのであれば、設置するだけの価値はあると考えたからだ。子どもの中の好奇心・感性が育ち、それがさらなる学習意欲につながることも期待し、考え出された。

自然理解の授業としても有効的に活用でき、実感をともなった学習ができる。しかし、これらの「自然コーナー」はあくまでも「人工」であるため、必ず人が管理し続けなければならない。子どもの安全を守るためにも、学校側が自然を管理することは前提条件となる。

② 二つめに、子どもたちが要望を出せる**“要望ポスト”**を設置することを私たちは考えた。教師だけの考えで教育を進め、子どもたちの意見や考えに注目しなければ、いつか子どもとの間に大きなズレが生じるということと、子どもたちも学校をつくっていく大事な一人だという考えから打ち出された。

出された意見の中には、子どもたちだけでは解決できない問題や児童・教師に対する誹謗・中傷なども含まれる可能性があると推測される。

⇩

そのため、開票は教師が行い、内容を教師同士で確認し合った後に、児童と共に考えていく場をその都度設けていくことにした。

教育的価値があるものかどうかをしっかり見極めなければならないが、はじめから「こんな案はだめだ」という風に教師側が決め付けないように留意する必要がある。それぞれの案や意見を大切にしていくことで、子どもたちは「自分たちのことをしっかり見てくれている」と感じるはずである。その信頼感が、子どもたちに意見を出す際の責任感も育てる。

敷地や予算の都合で実現するのが難しい問題についても必ず児童に説明し、納得させるように話し合うことが重要だ。

この取り組みにより、児童が自分の思いを伝えられる場を作ることができ、また教師は、児童の実態を知ることができる。つまり、日々の教育活動に活かすことができるのだ。

③ 三つめに、**“放課後学習のサポート”**を実施する。これは、放課後に宿題をしたり、分からないところをもう一度教えてもらったりする、児童の希望に応じた学習場所と機会の提供である。教室を開放し、教師が子どもの学習をサポートしていくようにする。基本的に自由参加だが、つまずいている子どもには特に配慮をし、取り戻せるようにしていく必要がある。勉強が分かるということは、次の意欲を湧かせることにつながる。<分かる→うれしい→意欲>という良い循環が続くように努めなければならない。

(3)家庭からの視点

【社会生活と子育ての両立】

「開かれた学校」を目指すということは、家庭にとって、“子どもを安心して預けられる場所”を整えることでもある。子育てと社会生活を両立させるためのサポートとして役割を果たすように考えていった。

① まず、共働きの家庭や諸事情がある家庭を含めて、誰でも自由に参加できる**学童施設**を設置する。この学童は学校の敷地内にあり、放課後に立ち寄って遊べるようなアットホームな場所である。また、この学童は忙しい家庭をサポートし、**夜までの預かり**や**ショートステイ**(宿泊)も行う。

② 二つめに、**家庭訪問**を年に1回と限らず、必要に応じて実施する。教師側からの場合も、保護者側からの場合も共に、要請や必要性があれば実施することとした。

③ 三つめに、**自由参観**を行う。たくさんの方に子どもたちの様子を見てもらうために、一日どの時間帯でも参観できるようにする。

④ 四つめに、**子育て支援教室**や**相談日**を設けることを考えた。日々の子育ての悩みや情報交換など、様々な話題で交流し、子育てに関わる人たちのより所となるようにしていきたい。教師や地域の人たちと協力して、その都度内容を決めていきたいと考えている。

数回の家庭訪問だけでは分からないことも、こういう機会を増やすことで家庭状況や子どもの様子など、情報を多く得ることができ、学級運営にも役立てることができる。

⑤　大事なわが子を預けるという点で、学校は安全対策をしておく必要がある。

そこで、校門に警備室を設置し、警備員の目で子どもの安全を守る仕組みにする。また、地域の警察とも直結しているため、事件が起こったときも迅速に対応できる。

(4)地域の視点

【“みんなで育てる”地域づくり】

子どもたちは地域の中で生活している。したがって、地域の方とも学校と関われる機会をつくり、理解を深めてもらうことが重要である。

①　一つめに、地域の方が参加できるようなイベントを季節に応じて催し、子ども・保護者・地域の方が交流できる機会をつくる。また、地域の有志の方による**「読み聞かせ」**や**「伝承遊び教室」**などを実施していきたい。これらは要望ポストで児童から出された意見も交えながら企画していく。

②　二つめに、**地域を学習の教材**として用い、地域の方に協力していただいて学習活動を展開していく。

③　三つめは、学校のおたよりを保護者だけでなく、地域の方にも知っていただくために**地域向けにじのこ便り**を回覧させていく。この方法で、保護者以外の方にも学校での取り組みを理解してもらえるようにする。活動やイベントなどの宣伝もできるため、便利である。

2章．多様な能力を持った学習者一人ひとりの学力を高めるために

～算数の基礎学力を定着させる方法～

1．教育改革

教育指導要領は、戦後日本が独立してから 10 年に 1 度の改定を目安に見直されてきた。問題点を見極め、新しく編成するには 10 年程度の期間が必要というのが理由だそうだ。

文部科学省は 2002 年度（高校は 2003 年度）から、学校の完全週５日制に合わせて教科内容の３割削減を決定した。

しかし、この改革が子どもたちの「学力低下」を招き、問題があらたに出てくるのではないかと指摘する声があげられ始めると、今度は**「確かな学力」**の向上が政策的スローガンとして掲げられるようになってきた。

子どもたちが抱える問題に対応し、“自ら学び、自ら考え、問題を解決する能力や豊か

な人間性を育てよう”というスローガンのもと、「ゆとり教育」「総合的な学習」が取り入れられてきたのだが、この方針が揺らいできているようにも感じられる。ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の定着を図り、一人ひとりに応じた細やかな指導ができるように工夫していくことが今求められている。

文科省内にも「必ずしも正しい選択をしたとは言い切れない」という意見があり、必要に応じて数年単位で内容を見直すということも考えられている。しかし、学力の変化を長期的に調べた調査が存在しないことから、『マスコミが騒ぐほど「学力低下」を示すデータが存在しない』という声もあるのだ。(『学力を問い直す』p.5　佐藤学著)
「確かな学力」を定着させるために、文科省も模索し続けている状態だと言えるだろう。

２．学力低下の実態

学力低下の問題を考えるにあたり、子どもたちの学力がどのように変化しているかを確かめることが必要である。

1989 年に大阪大学のグループが実施した「学力・生活総合実態調査」をもとに、苅谷剛彦らが関西都市圏で「学力テスト」と「生活・学習アンケート」を 2001 年に実施し、比較している。

この調査ではっきりとしたことは、まず、小・中学生の基礎学力が確実に低下していることと、子どもたちの学力の格差が広がっているということである。
（※ここでの学力は、どれも基礎的な知識と技能を計っており、発展的な内容ではない。）
ここでいう「学力」とは、授業で教える内容の到達度を指している。つまり、テストで測定される学力のことである。

調査教科…国語、算数・数学

- 国語…「長文読解」「文章構成」「文法」「漢字」
- 算数…「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」
- 数学の「数と式」のサブ領域…「正負の数」「文字と式」「方程式」
  （他は算数と同じ設定）

【小学生】

小学生の学力テストでは、算数・国語とも、ほとんどの領域で学力が低下している。算数においては、特に〈量と測定〉〈図形〉〈数量関係〉の３領域での低下が著しく、学力低下が‘計算’だけの問題でないことがはっきりしたと言える。

国語では〈長文読解〉と〈文法〉の低下幅が大きく、基本的な言葉のルールを獲得できていないことが読み取れる。

また、日本の学力を国際的に比較した IEA の 1995 年と 1999 年の調査結果から、数学が「嫌い」「大嫌い」という子どもが増加していることも明らかになっている。（「嫌い」は 36%から 38%へ、「大嫌い」は 11%から 14%へ増加。） さらに、中学生の「勉強の意欲」に関する調査結果では、「もっと勉強したい」と答えた生徒が 1965 年から 2000 年の間で、65.1%から 23.8%に激減していることもあげられている。（『学力を問い直す』p.21　佐藤学　著）

このことから、算数がわからない児童がそのままの状態で中学生になり、ますます理解できなくなっているのではないか推測できる。調査結果からも、“理解できること”と“やる気”とは確実に結びついていると言える。したがって、小学校の段階で“分からないからやる気がでない”という児童が１人でもいなくなるような指導を目指したい。

３．算数の授業工夫

【算数の授業～実践例～】

児童一人ひとりが算数に興味を持てるような授業の工夫があれば、子どもたちの意欲は格段に上がるはずである。そこで、実際に行われている授業の例を参考に挙げてみることにする。

出雲市立四絡小学校２年生の算数で、「1000 までの数」という学習がホームページに掲載されているが、この学習では**“大豆”**を使って、100 を超える数を工夫して数える学習を行っていた。

ポイントは、**具体物**を使ってどれだけ工夫して数を数えられるかということである。この活動の中で、10 のまとまり 100 のまとまりを作ると数えやすいということに気づき、また、大豆の数を数字やブロックに表すことを展開していく。その他にも展開中の活動・学習はたくさんある。

【数量関係の授業工夫】

苅谷剛彦らの調査で、算数の学力低下が認められたが、その中でも一番得点が低下していたのは〈数量関係〉である。この領域を、どのように子どもたちと取り組んでいけば学習効果が高まるのかを自分なりに考えていきたい。

数量関係とは、以下のような学習内容を指す。

50 円切手４まいと、70 円切手３まいをかいました。いくらはらえばいいですか。
式をかいてときなさい。

（『「学力低下」の実態』より）

このような問題が出されたときに、子どもたちはどのような思考をするのだろうか。この問題であれば、私なら実際に切手をイメージして考える。子どもたちが問題に興味を示し、じっくりと取り組めば必ず解ける問題なのである。

そこで、黒板や教科書などの文字だけに頼る学習ではなく、具体物を使った授業方法で問題解決を図っていくことにする。

子どもは発達段階上、論理的に思考することが難しい。しかし、子どもは“遊びを通して学ぶ”と言われるように、体験的・経験的に学習することで理解していくのである。そういう面を考慮すれば、学習時に具体物を操作する方法は有効だといえるであろう。

例えば、先ほどの実践例でもあったように大豆を使ったり、ブロックを使ったり、その他にも場所（体育館の床、運動場、学区、教室など）、ゲーム、表やグラフに表す活動など様々な活動が考えられる。このような、数量や図形について目的意識を持って取り組む作業的・体験的な活動である算数的活動を取り入れることで、授業は活性化すると考えられる。また、その活動中に次の２点ができることとして挙げられる。

- 楽しさや日常生活に役立つことが実感できる。
- 多面的に問題を解決したり、数や図形の美しさに感動したりするなどの創造性の基礎を培うことができる。

これらのメリットを活かして授業作りを考えていくことが重要なのである。

また、子どもたちにじっくりと自分で考える時間（自力解決の時間）を与えることも重要なポイントとなる。理解の早い児童だけで授業が進められていけば、その他の児童の意欲が低下するのは必至である。したがって、2 人担任制を生かして、つまずいている児童

に支援をしながら、個々に思考させる過程を設ける。また、教師２人ならば教師１人の場合と同じ時間でも、より多くの児童に対応できるという利点があげられる。

- 目の前にいる子どもたちの学力の実態を把握できるため、その実態に応じて今後の計画を立て直すことが可能になる。一人ひとりが“わかった”という状態になることを目指せば、クラス全体の意欲が上がることは想像に難くない。
- １人の教師が前で授業展開をしている間も子どもの学習の支援ができ、一人ひとりのつまずきや疑問に応えることが可能になる。その結果“わからなくてやる気がでない”子どもを減らしていける。
- 理解が早い子どもに対しても、意欲が出るような授業内容にしていくことが必要であり、その内容として考えたこと・分かったことを発表できる場を設定する。

⇩

自分の考えを発表することは、達成感や満足感を得られる活動であるからだ。また、自分の意見に自信を持つこともでき、自己肯定感も高まるのではないだろうか。互いの考えを交換し、「あぁそうか！」や「そのやり方はどうかな…？」といった意見交換が、子どもたち一人ひとりの積極性を引き出し、主体的に関わっていける要因となる。

そして、この活動では“ただ覚える”だけでなく“仕組みや考え方”を自分たちで模索していくことにより、気づいて、獲得することを重点に置いて進めていきたい。そして、さまざまな能力を持つ児童たちが「共同学習」を通して、学力を向上させていけるようにグルーピングすることも考えている。

４．国語科との関連

数量関係を解くにあたっては、文章の意味を正確に読み取ることも必要となる。問題文が読めなかったり、語句の意味が分からなかったりして、算数の学習が進まなくなる状態をなくすことが重要だ。したがって、国語科の学習も算数と同時に基礎を定着させていく必要がある。

日本の子どもの学力の弱点が「基礎」よりも「応用」「発展」の領域にあることは、IEA の調査で明らかになっている。ここで、この「応用」の力をつけるために、「国語としての算数」（『子どもに伝えたい〈三つに力〉』斎藤孝　著）を取り入れる。

- すでに論理的に組まれている数学（算数）の問題を日本語で論理的に説明する訓練を行う。言語化することで、意味を関連付けながら論理的に考える能力が養われるのだ。この能力を養うことは、国語の能力を高めることにつながる。

そこで、上記以外にも学校教育で次のような実践をしたい。

例えば、朝の読書や漢字・語句の練習、絵本・本の読み聞かせ等、国語の授業以外でも言語に関する取り組みをしていく。児童が取り組みやすいものから提示していくようにする。興味のあるところから言語能力を伸ばしていくことをねらいとしている。

このように授業内容を検討し工夫していけば、子どもたちの学習意欲も上がってくるはずである。“わかる”という実感が次への意欲となることを教師が十分に理解し、常に児童の実態に即した授業をするように努力していくことが一番重要なことである。

５．家庭との連携

子どもの学力は学校や教師だけの工夫や努力で身につくものではない。学校と家庭とが連携し、子どもが学習していける環境を整えていくことこそが、私たちが目指す学校づくりで欠かせないことだ。

IEA の調査で「帰宅後の勉強時間」を調べたものがあるが、「ほとんど勉強しない」が増加している。これは、学習する習慣がついていないということである。家庭で宿題や復習をする習慣づけをしてもらうように、保護者の方に伝えると共に、忙しい家庭のために放課後の学校で学習する場を設けることも学校側として対応すべきことである。

私たちが構想した「にじのこ小学校」には、放課後子どもたちが自由に過ごせる学童施設が設置されている。また、教師が子どもたちの放課後学習も保障しているため、子どもが学習する場は整っていると言える。家庭と関わりを持ち、共に協力して子どもたちを育てていく姿勢を、家庭に伝えていくことが重要だ。

3章．学習者の学習成果をどのように評価するか

学習者である児童の学習成果を評価するために、「到達度評価」を取り入れる。この「到達度評価」では、平均点や偏差値のような集団の基準で評価せず、あらかじめ教育的な配慮で設定しておいた到達基準に則して、学力を評価する。つまり、他の児童と比較することなく児童個人の学力を評価するのである。

また、教育の過程において「形成的評価」を取り入れ、学習による学力の成果をはかりながら授業を進めていきたい。この評価方法は、2 人担任制の利点を活用できるものである。この 2 担人制で行う日々の授業は、一人が全体指導を、もう一人の教師が児童の学習サポートをして彼らの学習状態を把握していく。つまり、「形成的評価」ができる体制が整っていると言える。

したがって、「到達度評価」と「形成的評価」を導入した学習である「到達学習」を行っていく。この方法をとることで、児童が劣等感に悩むことや、偏差値が高いことだけを誇りにする児童が減り、学校での教育も正常なものへとなっていくと考えられる。

4章. 教育方法学の感想と学習後の印象

1. チーム学習を通しての感想

この授業では、自分の性格や能力を調査した上で組まれたチームで学習を進めてきた。一人ひとりの資質を調べて組むということが私にとっては新鮮だったので、どんな効果があるのだろうと思っていた。いざチーム学習が始まると、その効果がわかった。話をまとめて皆に全体像をつかませるのが上手な司会役の人、皆の発言をもれなく聞き取り記録する役の人、L-support 提出のためにワードでまとめてくれた人、話が煮詰まった時に違う視点から意見を言ってくれる人、話がずれた時に軌道修正してくれる人など、それぞれが持つ良さが引き立っていた。

このように、“みんな一人ひとりが、学習を支えている”と実感できた時、チームの一人ひとりが責任感を持ち、取り組んでいけるのではないだろうか。そして、自分では考え付かないような意見が学びを深くさせていくのだと実感できた。また、分からないことや疑問に感じたことを聞き合える人間関係をつくることが重要だと言える。私のチームはそういう関係が作られたため、発言しやすくなり、議論が活発になっていったからだ。これらのことから、チームで学習する際はメンバーの性格と能力を考慮することで、学習は一段と質の高いものにできると感じた。

2. 学習後の印象

チーム学習で「理想の学校」を考えていくことは、私たちが「学校」というものをどのように捉え、どういうものであってほしいかを考えることができる貴重な時間であった。私は介護等体験のために、残念ながら、第一回ポスターセッションには参加できなかった。他のチームの発表を直接見られなかったことで、他のチームがどのような学校を構想したのかということがあまり印象に残っていない。文章を読むよりも、一度でも発表を見た方が印象深くなるのではないかなと感じ、とても残念に思っている。活動に参加しなかったのがたった一回であっても、自分がいなかった時に進んだことをい

うのは、学習が“近い”ものから“遠い”ものへと遠ざかっていくような印象を受けた。言葉でうまく表現できないが、その遠ざかってしまったものを取り返すには、自分自身のやる気を奮い立たせなければならないと感じた。しかし、チームで理想の学校を構想でき、学校教育に対する考えが深まったのでとても良かったと思っている。

5章. 自己評価と公開同意書

このレポートが目指しているレベル　（ A ）

＊＊　このレポートでアピールしたいポイント　＊＊

チームで構想した学校が、どのような特徴を持っているのかを、図や色を使い、視覚的に捉えられるように工夫しました。また、2 人担任制の説明ではメリットだけでなく、デメリットも示していくことでそれらに対する対応も明確にしようと記述しました。第 2 章では、算数から国語へ、学校から家庭へと話を展開させています。部分的に考えるのではなく、関連させて考えることを重要視しました。

＊＊　レポートを次の視点で自己評価してください。　＊＊

①参考文献・引用文献、参考 URL を示すことが 〔 できた ・ できなかった 〕

（盗作ではなく、自分の主張を展開するときの根拠として使用し、誰の文章やデータを使用したかったについて表記しているかどうか）

②「感想」(「だと思う」調)ではなく「論理」(「である」調)で主張 〔 できた ・ できなかった 〕

③読み手が読みやすいように配慮することが 〔 できた ・ できなかった 〕

（長すぎる文章を羅列するのではなく小見出しをつけたか、図や表の表示量は適切であったか など）

レポート公開同意書

このレポートを後輩が受講する「教育方法学」で公開してもよいですか。また、大学の web 上に公開が認められるとしたら web 上に公開してもよいですか。

後輩への公開について（1）　実名入りで公開してもかまいません

Web 上の公開について（1）　実名入りで公表してもかまいません

2005年1月20日　氏名（ 竹内 夕子 ）

≪参考・引用文献，参考URL≫

■『「学力低下」の実態』 苅谷剛彦 志水広吉 清水睦美 諸田裕子 著 2002 年 岩波ブックレット

- 『学力を問い直す』 佐藤学 著 2001 年 岩波ブックレット
- 上戸ティーム・ティーチング(KTT)の実施について(宇都宮市立上戸小学校)

http://www.ueis.ed.jp/school/kamitomaturi/index.html

- 数学科もティーム・ティーチングの指導法を探る

http://www2.nkansai.ne.jp/users/yoshioka/ttsido.htm

- 到達度評価のホームページ http://www5a.biglobe.ne.jp/~totatu/
- 『「学び」から逃走するこどもたち』 佐藤学 著 2000 年 岩波ブックレット
- 『子どもに伝えたい〈三つの力〉』 斎藤孝 著 2001 年 NHK ブックス
- 『教育の方法と技術』 西之園晴夫 宮寺晃夫 著 2004 年 ミルネヴァ書房